

「さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。」（マタイ4:1,2）

断食とは、読んで字のごとく、意図的に食を断つことをいいます。現代日本では、不食やプチ・ダイエットと銘打って、飽食によって失った健康を断食によって取り戻そうという動きがあります。また、ハンガーストライキなど、注目を集めて政治的な主張を通したりするための断食もあり、健康・政治のための断食はありますが、宗教的な動機による断食とはどんなものでしょうか。

世界の宗教の多くに、宗教的行事あるいは修行としての「断食」があります。

有名なものは、イスラム教です。ラマダーンという太陰暦であるイスラム歴の月に、イスラム教徒に課された約1月間の断食です。日没後は食事を摂ることが許されているとはいえ、毎年一ヶ月間、義務づけられた厳しい宗教的儀式であり、イスラム教の教祖ムハンマド（マホメット）が故郷で迫害され、別の町（メディナ）に拠点を移し、そこでの戦い、苦難を記念するため定められたものです。ラマダーンの月の断食は、日中の食を断つだけでなく、嘘や、下品な話、口論、喧嘩、淫らな思考も断つ、という意味で内心にも関わる宗教的なものです。

瞑想が主とされる本来の仏教では、食への執着や、逆に集中力・体力を失うまで行う断食等は、瞑想を邪魔するものであれば拒否されます。教義的には、断食はありません。ただ、修行の過程ですさまじい断食を行った釈迦の像が残されており、修行僧の中では断食をして即身仏となることを望んだ者や、千日間の修行の一部として九日間の断食・断水・不眠・不臥を行う現代にも生きる伝統があります。

主は荒野で四十日四十夜、断食された、とみことばにあります。しかもその四十日間断食中ではなく、その後に「空腹を覚えられ」ておられます。不思議な表現です。四十日の断食には空腹を感じられなかったのでしょうか？そしてその後、お感じになった空腹とは、どんな空腹であったのでしょうか？

キリスト教の直前の教会、ユダヤ教会の場合をみてみましょう。ユダヤ教では、レビ記16章にいう贖罪を表す日に、唾液さえ飲み込まない厳しい断食が課せられていますが、レビ記自体の中には、断食が命じられた記述はありません。

過去のユダヤ民族の断食の様子が、天界の秘義で描かれています。

「彼らは、罰せられた後、どんな民族も真似できないような外面的卑下を示すことができました、というのは、地面の上に三日の間、終日ひれ伏し、塵の中で転げまわることができます。・・・連続して何日も断食することができ、その間血の涙を流すこともできました。」

と、現代日本の私たちの感覚では、とても想像もつかないことを平気で行います。

千日回峰行の九日間の断食・断水・不眠・不臥も、すさまじいものですが、これは覚悟をしてその世界に入った行者さんの話であり、当時のユダヤ民族のように誰しも行うといったものではありません。その原動力となるものが天界の秘義のうちに、こう描かれています。

「しかし、これらは肉体的そして地上的な愛、すなわち自分たちの優越性と世の富を失う恐れの実現だけであったのです。彼らを突き動かす内面的なものは全く存在せず、それは内面的なもの、死後の生命や永遠の救いといったものを、全く知らず、知ろうとも思わなかったからです。」（天界の秘義 4293③）

これらの全く内面的なものが存在していなかったユダヤ民族に対して、主は直接的な警告をされておられます。イザヤ書の58章です。

断食をしたのになぜ認めてくれないのか、と訴える者に対して、主は語られます。

「見よ。あなたがたは断食の日に、自分の喜びを見だし、不満のつけのすべてを支払わせようとする。見よ。あなたがたが断食をするのは、争いとけんかをするためであり、不法のこぶしで打つためだ。」（イザヤ 58:3, 4）

見かけだけの信仰的な行いをする者に対して、その内面が全く行いからかけ離れていることを指摘されます。信仰的に見える行いの内側は、自分の身勝手な喜びを求めているだけで、自分が被った不利益をすべて取り返そうとしている。その行いは自分の正当性を証明しようとしているだけにすぎない。

さらに、「不法のこぶしで打つ」とは、悪からわき起こった偽りの総力を挙げて行う（天界の秘義 9025）ことです。

一見信仰的に見えても、その実は全く仁愛からかけ離れた、悪そのものであることを示されています。（預言者と詩編 58）

そして、正しい断食を教えられます。

「あなたがたの声をいと高き所に届けるためには、今のような断食をしてはならない。わたしの好む断食は、これではないか。」（58:4, 5）

それは、

「悪のきずなを解き、くびきのなわめをほどき、しいたげられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くこと」（58:6）

これは、悔い改めを意味しています（霊的確信 82）。

みせかけだけ、信心深く話すことではなく、実際に悪を避けること（預言者と詩編 58）です。縛られている悪から自分を解放し、自分の悪によって、意識的あるいは無意識に虐げている者を、自分を含めて自由にすることです。これを行うには悔い改めの他に道はありません。自分を振り返って、実際に悪を行っていることを確認し、主に祈って、悪を避ける新しい生活を始めます。（真のキリスト教 530, 535）

「飢えた者に、あなたのパンを分け与え、
苦しむ人、抑圧された人々を家に入れること。
裸の人を見て、彼を覆い、あなた自身をあなたの肉親から隠さないこと。」 (58:7)

これは、仁愛の実践を言っています (預言者と詩編 58)。
自分の放縦な欲を抑え、思うままの美食や、好き勝手な行動を控え、その分、わずかでも苦しんでいる人や困っている人のことを思い、分け与え、善をなそうと、行動で表すことが大切です。その内容は、文字通りではありません。日本の大多数の人が住んでいる小さな家屋に、苦しむ人や抑圧された人を受入続ければ、自分も受け入れた人もいつか破綻します。それよりも、自分の欲望を幾分か抑えて、人のことを思い、その人の役に立つことを行うことです。さらに、親兄妹子供等の家族から逃げ、自分のなすべき義務がおろそかになっていないか、改めて自分の役割を振り返り、その義務を果たします。

そしてこれを自分のため、すなわち世間体を良くするため、あるいは何らかの見返りを求めて行うのではなく、純粹に主の愛と隣人愛から行います。(天界の秘義 2156, 3419:4 参照) 主がそうせよとお命じになったから行う、あるいは自分に他人よりもより高い義務があり、自分が行うのが妥当であるから行う。そしてそれが主や隣人のためになるから、喜んで行う、といった境地にまで達すればいいことはありません。

もちろん、ここには霊的な意義もふんだんに含まれており、愛が欠乏して求めている人に、主の愛と隣人愛を分け与え、善の欠けている人には善を与え、真理の欠けている人には真理を与えます。真理を与えるにしても、相手かまわず、教義を一方向的に語ることが真理を与えることではなく、相手の受け入れる状態に、受け入れる方法をじっくり考えて、主の愛を伝えます。

そうすることで、「彼らは真理に富み、主がともにおられるようになり、教会が彼らの内に存在するようになり、教会のすべてのものが回復される。そして主と教会の結合を聖なるものとするなら、彼らは天界に入るであろう」 (預言者と詩編 58) と説かれます。

「もし、あなたの中から、くびきと、うしろ指をさすことや、悪意のおしゃべりを除き、
・・・あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を「喜びの日」と呼び、エホバの聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、」そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。」 (イザヤ 58:13, 14) となり、主の喜びと人の喜びが同じとなることで愛による結合が起こり天界に入ります。主と愛によってむすびつくことが天界であるからです。

悪意や人への批判などのすべての悪を、主に対する罪として避け、自分の好きなことを思いまま行うことをやめ、主ご自身の戒めと御心を自分の中心に持ってゆくなら、主と結びついて、天界に入

るであろうというという、めでたい預言です。

主がイザヤ書で教えられているように、断食の本質は、悪や自分の好きなことを断つことにあります。

そうであるならば、主が荒野でなさった四十日四十夜の断食と、そしてその断食の後、「空腹を覚えられた」の意味が明らかになってきます。

四十日四十夜とは継続した試練の状態を表しています。主は実にごく幼少のころからこの世の最後の生の瞬間まで試練が続いていました。この断食とは、試練の悲惨な状態を表すとともに、主がマリアから来る遺伝悪を拒まれていたことを意味するものと考えられます。

さらにその断食の後に覚えられた空腹、天界の秘義1690 [3]は、この空腹について、

「主の生命は、全人類に対する愛でした。・・・この愛が主の生命そのものであったことは、主が「空腹を覚えられた」こと・・・で意味されている」と教えています。

「あらゆる試練は、その人にある愛に対しての攻撃であり、試練の程度はその愛の程度に従います。愛が攻撃されないなら、そこには試練はありません。他人の愛を破壊するのは、その人に生命自体を攻撃するものです、というのは愛がその人に生命であるからです。」

主の人類に対する無限の愛に対して、地獄全体が無限の試練をもって襲ってきます。主はこの試練にことごとく勝利され、私たちに、主の導きと力を求めながら、その跡をたどってくるよう招いておられます。この人類への強い愛に飢えて、主は空腹を感じられたのです。

私たちの愛は何でしょうか？いつも自分の不満を語り、それを他人へ向けて、悪を行ってはいないでしょうか？天界の教義を学び、学んで、学んで、そしてまだ飽き足らず学び、それなのに、人の悪口を言わないなどの小さな悪さえほしいままにしておき、あるいはほんのわずかな仁愛の実行もせず、学ぶだけの愛とはなっていないでしょうか？

悪のくびきをかけられたまま、うしろ指をさし、悪意のおしゃべりを続け、安息日に約束があるから、楽しいからと勝手気ままに出歩き旅をして、主の聖日には自分の好みにどっぷり浸り、安息日の本来の意味である、魂の平安を求めることを忘れてはいないでしょうか？教義についてのおしゃべりや議論に終始して、つらい自己点検や悔い改めをないがしろにしていないでしょうか？

世界で苦しむ人、回りで苦しむ人の報道を見て、心を動かし、自分の好きなことをわずかでも抑えて、その人たちのために何かしてあげるといふ心を養い、その思いから実際に行動する。また同じ教義を学ぶ人々に、知識を誇ることなく、生きてゆく現実の生活の中で大切なものは何か、教え合い、何をすることができるか話し合う。これを繰り返してゆくことで、私たちの中で何か動き、その中で主がひそかに新たな創造をされ、新しい自分が育ってゆきます。自分の好みを抑えながら真の平安を求め、主の導きのままに進むなら、その先には天界が待っています。

考えましょう。自分が自分に自分の好みのまますべてを動かされていないか。そのわずかでも、自分の好みを断ち、主のお求めになる本物の断食をするならば、イザヤ書にあるような主と私たちの喜びの日が実現され、その日が天界に入る日となります。

安息日を「喜びの日」と呼び、エホバの聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、」そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。」(イザヤ 58:13, 14) アーメン

第一朗読 イザヤ 58:1-14

のどで叫べ、「保て」、そして「戻るな」と。声を雄羊の角笛のようにあげ、私の民にその違法を告げ、ヤコブの家にその罪を告げよ。

日に日に彼らは私に尋ねる。彼らが喜ぶ私の道を知って、正義を行う国として、彼らの神の裁きを捨てず、私に正義の裁きを尋ねて、神に近づくことを喜ぶ

彼らは言う。「私たちが断食したのに、なぜ、あなたはご覧にならなかったのですか。私たちが魂を苦しめたのに、どうしてそれを認めてくださらないのですか。」見よ。あなたがたは断食の日に、自分の歓びを見いだし、不満のすべてを支払わせようとする。

見よ。あなたがたが断食をするのは、争いとけんかをするためであり、不法のこぼしで打つためだ。あなたがたは今、断食をしているが、あなたがたの声をいと高き所に届けるためには、今のような断食をしてはならない。

わたしが選んだ断食とはこのようなものだろうか？自分の魂を苦しめる日なのか？

葦のように頭を垂れ、荒布と灰を敷き広げることだろうか。これを、あなたがたは断食と呼び、エホバに喜ばれる日と呼ぶのか。

わたしの好む断食は、これではないか。悪のきずなを解き、くびきのなわめをほどき、しいたげられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。

飢えた者に、あなたのパンを分け与え、苦しむ人、抑圧された人々を家に入れることではないか？

裸の人を見れば、彼を覆い、あなた自身をあなたの肉親から隠さないことではないか。

そのとき、暁のようにあなたの光がさし、あなたの健やかさはすみやかに増す。あなたの義はあなたの前に進み、エホバの栄光が、あなたの後ろに集まる。

そのとき、あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと、「わたしを見よ！」と仰せられる。もし、あなたの中から、くびきと、うしろ指をさすことや、悪意のおしゃべりを除き、

あなたの魂が、飢えた者に与え、悩む者の魂を満足させるなら、あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの厚い闇は、真昼のようになる。

エホバは絶えず、あなたを導いて、焼けつく土地でも、あなたの魂を満たし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。

あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは古代の礎を築き直し、「破れを繕う者、市街を住めるように回復する者。」と呼ばれよう。

もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を「喜びの日」と呼び、エホバの聖日を「はえある日」と呼び、これを尊んで旅をせず、自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、

そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。「わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、あなたの父ヤコブのゆずりの地であなたを養う。」と主の御口が語られたからである。

第二朗読 マタイ 4:1-4

さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。

そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。

すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命

じなさい。」

イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

第三朗読 天界の秘義1690 [3]

あらゆる試練は、その人にある愛に対しての攻撃であり、試練の程度はその愛の程度に従います。愛が攻撃されないなら、そこには試練はありません。他人の愛を破壊するのは、その人の生命自体を攻撃するものです、というのは愛がその人に生命であるからです。

主の生命は、全人類に対する愛でした。それはまことに偉大で、純粋な愛以外のなにものでもないという性質でした。彼のこの生命に対して、試練がたゆまなくやってきて、先に述べたように、ごく幼少のころから、この世における最後の時間まで起こっていました。この愛が主の生命そのものであったことは、主が「空腹を覚えられた」ことと、悪魔の以下の言葉で意味されています。

「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

(ルカ4:2-4; マタイ4:2-4)